

まちかど・ズームIN!

みなさんからの素敵な情報を待ってます!

声高らかに 高砂を謡う会



碧水園で1月21日、婚礼などのおめでたい席でよく謡われている謡曲「高砂」を、市民たちで謡う「高砂を謡う会」が開かれました。

昨年10月からけいこを積んできた市民など約70名は、5つの小謡からなる高砂を声高らかに謡いました。

また、この日は舞台開きも行われ、今年1年の精進を誓って、新春にふさわしい神楽、日本舞踊、箏曲、詩吟などが白石市伝統芸能振興会の皆さんによって披露されました。

指す手に力がこもる 新春囲碁・将棋大会



中央公民館で1月21日、第39回「新春囲碁将棋大会」が開かれました。

大会は実力に応じた段級別によるリーグ戦で行われ、参加した小学生から79歳までの53名は、真剣な表情で一手一手に取り組んでいました。

優勝者は次の方々です。(敬称略) 将棋の部：有段(我妻勝善 - 緑が丘) A組(高子義広 - 大畑) B組(高子孝志 - 大畑)

囲碁の部：A組(跡部民郎 - 大川町) B組(金井信夫 - 郡山)



動くかるたを追って ジャンボかるた大会

大きな絵札を背負って逃げ回る高学年の児童たちを、読み札に合わせて低学年の児童たちが追いかける「ジャンボかるた大会」が1月25日、白川小学校で行われました。

高学年といえども、必死で追いかけてくる低学年に追いつめられ、絵札につけられたひもを取られ万事休す。絵札が取られるたび、雪の校庭に歓声が響きました。

多彩な表情勢ぞろい こけし村「雛の宴展」



木のぬくもりとかわいらしい姿が特徴の木地びなを集めた「第7回雛の宴展」が、弥治郎こけし村で1月28日から開催されています。

今年は弥治郎や遠刈田、鳴子などの工人が精魂込めて制作した「立びな」「座りびな」「こまびな」など合わせて約200点を展示、即売。多彩な表情と色彩が来場者を楽しませ、遠くから訪れた人たちも目を細めていました。雛の宴展は3月4日まで開催されています。

鬼の目玉ぶっつぶせ



武家屋敷で「豆まき」

武家屋敷「旧小関家」で2月3日、数え42歳の厄年の男性が豆まきをして、今年の無事と幸福を祈りました。

親子連れなど約30人が見守る中、かみしも姿で豆をまいたのは「35・36年生白中同窓会」の代表3人。「福は内、鬼は外、天打ち、地打ち、鬼の目玉ぶっつぶせ」と、白石に伝わる独特の掛け声を上げながら、各部屋に威勢良く豆をまいていきました。

ふるさと白石を思いながら 白石子守歌を歌おう会



2月12日、「白石子守歌を歌おう会」がホワイトキューブで開かれ、3歳から73歳までの約50人の市民が参加しました。

参加者は、家族や友達などのグループごとにピアノ伴奏などに合わせて「白石子守歌」を熱唱。どのグループの歌声にも、客席はしんみりと聞き入っていました。

なお、この日歌った歌声はCDに録音され、後日、参加者にプレゼントされる予定です。

「住民発・地域づくり」白石から発信 みやぎ山ろく遊&湯サミット

白石市や蔵王町、鳴子町など、温泉を抱える県内11の首長が集まり、温泉やスキー場を活用した個性あるまちづくりを目指す第6回「みやぎ山ろく遊&湯サミット」が2月5日、白石スキー場センターハウスで開かれました。

市内のNPO法人など地域づくり活動をしている6団体の代表者が、これまでの活動状況などを報告。その後の意見交換では、民間活力を生かしたまちづくりの必要性を指摘する意見などが出されました。



一月二十四日、全国市長会のある委員会がもたれ、その中に高松市の増田市長の顔も見えた。会が始まる前、何人かの市長が増田さんのところに行つて、「やあ、御苦労さん。」とか言いながら励まし言葉述べていた。

高松市長と言えは思い出す方も多いたろうが、例の成人式の騒動で、壇上で挨拶文を読み上げていた最中に、一部の成人からクラッカーを鳴らされた当人である。私もよほどそばに行つて挨拶しようと思つたが、ちょっと躊躇するものがあった。成人式にあつたような行動をとつた連中は言語道断であるが、増田さんがその成人を告訴したという事に引つかかっていたのである。



川井市長の
せせらぎトーク

成人式を考える

得ないが、市長が市民を訴えることはあつてはならないという信念を持ち続けている。正直言つて、産廃のある問題について業者を訴えたいと考へたが、その訴訟を起こすと、一緒に上戸沢の市民も訴へることになるといつか気が付いて取りやめたこともあつた。

成人式が市長会で話題になつたのは、ここ一、二年のことではない。もう十年前前から成人式の前後に、首長の間でもうやめたいというぼやきが聞こえていた

ものである。幸いに白石の場合は比較的穏やかに過ぎてはいたのだが、公民館の職員には

それなりの苦勞があつたはずである。私も、二十歳の時に北海道の開拓を決定した若き片倉家の家老佐藤孝郷の話をして、同じく二十歳で単身横浜に出かけ、最新式の製粉機械を購入した白石興産の創始者鈴木富太郎さんの例を引いたりして、なるべく興味を持って静かに挨拶を聞いてもらいたい苦心をした。

しかし、三、四年前から、「諸君、成人式おめでとう。以上、終わり。」と云うことにした。長い挨拶を聞かされると思つていた成人たちは意表をつかれたように、「一瞬、おあつ」といふような声を上げ、盛大な拍手がおきる。ところが後がいけない。親の方から、せつかくの晴れの日なのに、市長の挨拶がただ一言ではあまりにひどすぎるのではないかと、いつたたくいの苦情がきた。

昨年の暮れには公民館長を呼び、「今年は何に合わないが、来年からは会費制を考えてくれ。会費は五百円程度でいい。ただし、その会費を経費に入れるつもりは全くない。使

い道は成人の皆さんに、例えば発展途上国で飢饉に苦しんでいる人たちに送るとか、国内で大災害が起こつたときの支援金に充てるとかいろいろ考へてもらえばいい。そのような気持ちを持った人だけが来てくれれば、立派な成人式になるだろう。」と話した。

そこで、今年の成人式では挨拶の中に一つ伏線を引いておいた。「諸君、成人式おめでとう。ただ、一言だけお話をしたい。ダラスで暗殺されたアメリカ大統領ジョン・F・ケネディに倣うわけではないが、これから諸君は人に何かをしてもらうのではなく、まず人に何をしあげられるかということを考える人間になつていただきたい。以上、終わり。」である。